

「美人の湯」に咲く蛍の光

温泉天国・北海道。たくさんの温泉がある中で、世界にもめずらしい北海道ならではの成り立ちと成分をもつ温泉がある。モール温泉だ。

モール温泉は、泥炭を通して湧出するもので独特の茶褐色の湯が特徴である。ドイツのバーデンバーデンにあるものが有名で、日本では、北海道の十勝に代表してみられるほか、石狩平野や豊富町などでも湧出している。呼び名のモールは「Moore」のドイツ語読みになむもので、泥炭のことを意味している。主成分は植物性腐食質で、鉱物成分より植物成分が多いのが他の温泉との違いだ。また、熱源は、地熱に加えて地下での植物の堆積物による発酵熱と考えられている。

北欧やロシアでは、泥炭の微粉末を温수에混ぜて入浴するそうだが、十勝川の場合、天然にこれらの泥炭質の可溶成分を含んで湧出している。この主成分はフミン質あるいはフミン酸といい、美容にも効果があると言われている。人体皮下浸透度が非常に高く、短時間で身体の上まで暖まり、さらに植物性でまろやかなため皮膚を刺激せず、入浴後は肌がスベスベすることから人気が高く、十勝川温泉ではモール温泉を「美人の湯」と呼び親しまれている。

十勝川温泉はかつてアシの生い茂る湿地帯に湧出し、そこに点在する沼は、厳寒の冬になっても凍ることなく、鹿や野生の馬などが傷を癒しに来

たと言われている。『十勝川温泉の歴史』（帯広百年記念館博物館ボランティアの会）によると、本格的な温泉利用は、1901（明治34）年頃に依馬喜平が、自然に湧いたぬるま湯を利用した大きな1m四方ほどの露天風呂を作り、近所の住民とともに利用したのが始まりとされている。温度が低かったために加熱して利用していたようだ。

その後、1911（明治44）年に本別出身の前田友三郎が簡単な建物を建てて、いわゆる湯治宿の経営を始めた。前田は1913（大正2）年に、当時帯広にあった十勝館という建物を買収し、この土地に総2階建て、延べ70坪の本格的な旅館を建て、経営を始めた。この建物は「風呂に入るだけで2銭もとられた」と言われるほど、当時としては豪華なものであった。これが今の笹井ホテルの前身である。

1928（昭和3）年には、雨宮駒平が温泉宿を創設した。雨宮は、客の誘致を図るために、乗合自動車の運行を計画。1930（昭和5）年、ようやく許可をとり、フォード28年型の大型乗用車を買入れ、帯広から一日4往復の定期運行を始めた。当時は雨宮温泉と呼ばれ、一般的にはあまり知られていなかったが、小樽新聞で広く全道から選定した5つの名泉の中に、将来非常に発展性があるということでの温泉が入った。

1931（昭和6）年、林豊洲が十勝川沿いの